

# 産業クラスターにおけるアンカー企業 ～ソーシャルキャピタル論の立場から～

国際協力学専攻 指導教官：湊隆幸准教授

47-076877 高橋雅紀

2009年3月修了予定

キーワード：産業クラスター、アンカー企業、ソーシャルキャピタル、紐帯のシナジー、中間媒体型

## 1. 研究の背景

日本の国際的な地位低下が指摘されるようになってから久しい。そのような中、日本経済を再生する切り札と目されているのが「産業クラスター」という概念である。「産業クラスター」は、地域のアクターが協力して生産性を高め、イノベーションを創出していく、企業ごとの競争力に加えて地域としての競争力を発揮していくという考え方である（図1参照）。

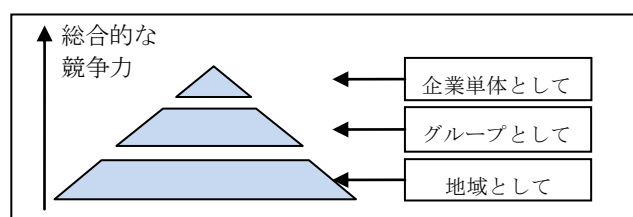


図1 企業の競争力 出典：筆者作成

クラスターが活性化するためには、「アンカー企業」の出現が重要である。「アンカー企業」とは、クラスター内企業の育成や革新的技術に関する情報の搬入などにより、様々な波及効果をクラスターにもたらし、クラスター全体の発展に寄与する企業のことである。

## 2. 研究の流れと問い

これまでその重要性がたびたび指摘されながらも包括的な議論がなされてこなかった「アンカー企業」の概念を整理する。また、集団内外を繋ぐネットワークを活性化させるためのメカニズムは、産業クラスター論や地域産業論、スモールワールド・ネットワーク論など多くの研究領域において解明され、強調されている。それらをソーシャルキャピタル論の立場を踏まえた上で整理し、「紐帯のシナジー」という概念やそのプロセスに関する分析フレームワークを提示する。

その上で、ナノテック株式会社を事例として以下のリサーチクエストに取り組む。

「産業クラスター内企業がアンカー企業へと成長する際には、どのようなプロセスを経るのか」

その際には、これまであまり議論されてこなかった資本提携による企業グループに注目し、企業グループとしての協力活動が地域としての協力活動を補完する役割を担い、クラスタが根付いていない日本において企業グループとしての協力が有効に機能する可能性があることなどを述べる。

## 3. ソーシャルキャピタルについて

本研究においては、以下の2つのソーシャルキャピタルを対象としている。

### ①「信頼」に基づくソーシャルキャピタル

冗長的な（閉鎖的な）ネットワークでは、固定的なメンバーの間で繰り返し行われる交流が相互依存関係を深め、集団的なアイデンティティを形成する（西口, 2007）。そのようなネットワークにおける「信頼」などのソーシャルキャピタルのこと。主に「強い紐帯」で発生する

### ②「仲介」に基づくソーシャルキャピタル

複数のネットワークを情報の流れから見た場合、「構造的な溝」が存在し、複数のグループ間で情報の流れが断絶されている場合がある。特定の組織や個人がこの「構造的な溝」を「仲介」すると、新しい情報の流れが発生する（同上）。このような場合における「仲介」の機会などのソーシャルキャピタルのこと。主に「弱い紐帯」で発生する。

「強い紐帯」と「弱い紐帯」が両立することによるシナジーを「紐帯のシナジー」と呼ぶことにする。

## 4. ナノテック株式会社の事例

ナノテックの事例は、産業クラスターにおけるアンカー企業出現の一例に過ぎない。しかし、ナノテックは産学官連携による地域政策や産学連携による共同研究など、現在注目されている活動を存分に活用することで成長してきたという経緯を持つ。したがって、その成長プロセスを解明することにより、日本の地域や中小企業の活性化を考える上で大きな示唆を得ることが出来ると考えられる。

ナノテックは、大手企業のDLC（ダイヤモンドライクカーボン：精密金型などの表面に施すコーティング）に関する開発チーム数名がスピンオフしてメンバーの自宅から等距離にある埼玉県白岡町に1989年に創業し、後に千葉県からの熱心な誘いもあり、千葉県の東葛テクノプラザという中小企業支援施設に入居した。経営者がナノテック設立以後、母校の日大で研究を進めるなど産学連携による共同研究を積極的に推し進めた。経営者は工学と理学の博士号を取得している。

ナノテックの特徴は、東葛地域内の中小企業も含めて合計6社と資本提携を結び、7社による企業グループを形成している点にある。

①現在「紐帯のシナジー」がどのように発生しているのか？

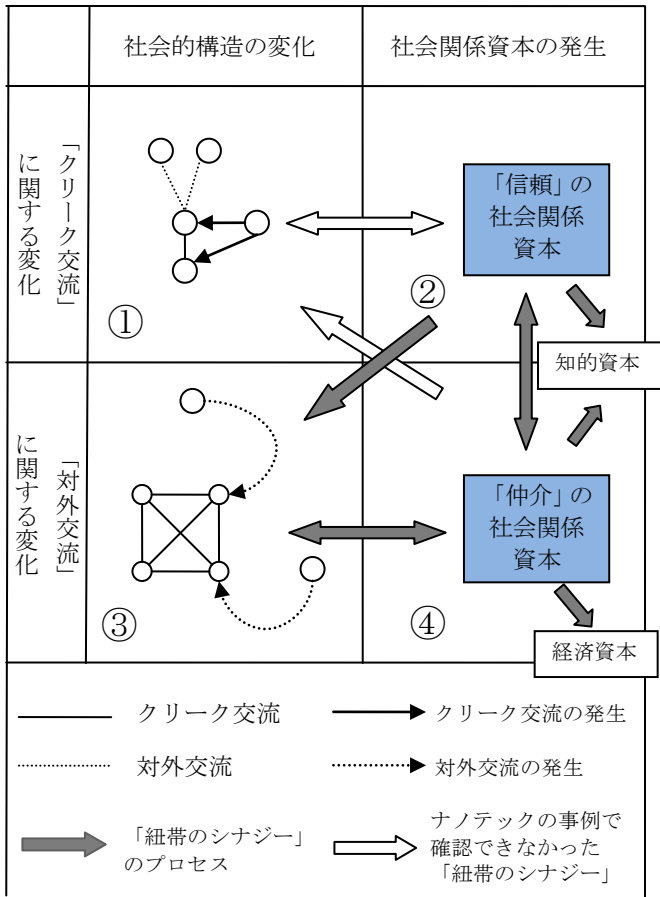


図2 紐帯のシナジーの分析フレームワーク 出典：筆者作成

ナノテックの事例の中では、ナノテックグループ内で「信頼」に基づくソーシャルキャピタルを有していることが(上図②に相当)、新しい取引先等の「対外交流」を引き寄せ(③)、「仲介」に基づくソーシャルキャピタルを発生している(④)。このことが更なる「信頼」の醸成に繋がるという好循環が発生している。これらのプロセスが「紐帯のシナジー」の例である。

②「紐帯のシナジー」はどのようなプロセスを経て発生したのか？

本研究が注目しているナノテックグループ形成の直接的な原因となったのは、東葛テクノプラザという「交流の場」があったこと、その「場」において「他社への訴求力」となる魅力的な戦略を取っていたこと、その裏付けとなる「資金調達力」を有していたことの3つである(図3参照)。

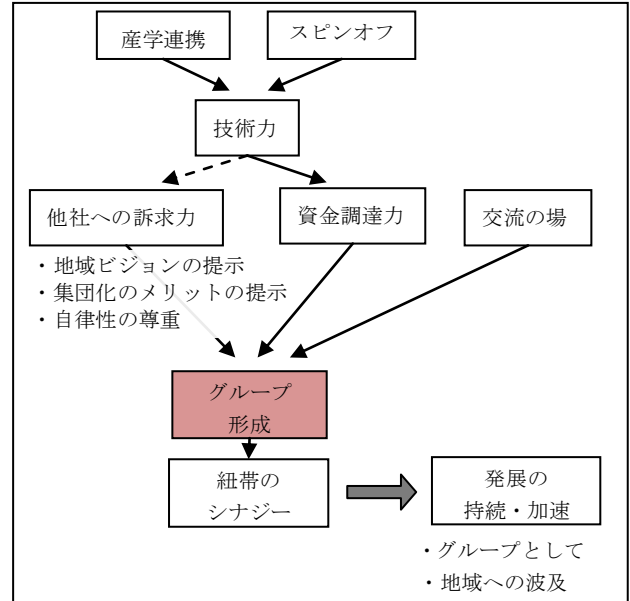


図3 ナノテックグループの発展プロセス 出典：筆者作成

## 5. 考察

クラスターが発生していくには、クラスター内で紐帯のシナジーが発生するかどうか鍵となり、一度閾値を超えることで発展が持続・加速するメカニズムが働く。しかし日本では歴史的に、特に地方部において、企業が分散して立地してきたことなどがクラスター発展の阻害要因となっている。

このような現状を打破するメカニズムとしてナノテックの取り組みは有効であると考えられる。またナノテックは、グループ企業の育成という面でも独自性がある。例えば金融機関や大学の研究室など中小企業単体ではアクセスしづらい「対外交流」に対して、ナノテックが仲介する「中間媒体型」と呼ばれるスキームが挙げられる(下図参照)。



図4 中間媒体型スキーム 出典：筆者作成

## 6. 主要参考文献

パート・ロナルド(著) 安田雪(訳)。(1992：2006). 競争の社会的構造. 新曜社.  
 T.J.アレン(著) 中村信夫(訳)。(1977：1984). ”技術の流れ”管理法. 開発社.  
 石倉洋子・藤田昌久・前田昇・金井一頼・山崎朗著(2003)「日本の産業クラスター戦略」  
 伊丹敬之・松島茂・橋川武郎編(1998)「産業集積の本質」有斐閣.  
 中小企業総合研究機構。(2003). 産業集積の新たな胎動. 同友館.  
 西口敏宏。(2007). 遠距離交際と近所づきあい. NTT出版.